

中
勘
助
の
恋

富岡多恵子

中 勘助の恋

富岡多恵子

創元社

富岡多恵子（とみおか たえこ）
1935年生。著書：『室生犀星』『こ
ういう時代の小説』『近松浄瑠璃
私考』以上筑摩書房『丘に向って
ひとは並ぶ』中央公論社『逆髪』
講談社『水上庭園』岩波書店『矩
形感覚』朝日新聞社、他

中 勘助の恋

* 検印省略

1993年11月10日 第1版第1刷発行

1994年2月20日 第1版第6刷発行

著 者 富 岡 多 恵 子

発行者 矢 部 文 治

印刷所 岩岡印刷株式会社

発行所 齋 創 元 社

(〒530)大阪市北区西天満1-4-2

TEL06-363-2531

東京支店(〒162)東京都新宿区山吹町334-11

TEL03-3269-1051

本書の全部または一部を無断で複写・複製することを禁じます。

目次

I 章	美しい母と「娘」——江木万世と妙子	5
II 章	「娘」と「父」の変容——猪谷妙子	38
III 章	短く長い三十五年の生——『猪谷妙子傳』と『妙子への手紙』	73
IV 章	兄と「姉」	104
V 章	結婚——鎮魂と再生のために	136
VI 章	『銀の匙』の背景	156
VII 章	『銀の匙』——「男らしさ」のない世界	186
VIII 章	漱石と勘助の文学——『銀の匙』の評価をめぐって	233
IX 章	愛と家族制度——『提婆達多』から『犬』へ	260
X 章	「女の子」たちと独居時代	302
XI 章	へ愛読者」と日記体随筆	334

中
勘
助
の
恋

I 章 美しい母と「娘」——江木万世と妙子

妙子熱愛日記

『郊外 その二』も中勘助の他の多くの日記体随筆作品と同様に、日記の体裁をとって日付が記されているが、共通の内容によって選ばれた「日」が連鎖していて、先に書かれた『郊外 その二』『孟宗の蔭』よりも「まとまり」つまり作意を強く感じさせる。まとまりを与えている内容の共通性というのは、筆者中勘助の妙子に対する感情とその行動のことで、下世話にいえば「妙子熱愛」が臆面もなく書かれた場面が意識的に選ばれ、まとめられた気配がある。『郊外 その二』の最初の日付は〈大正五年十二月二十六日〉となっている。この時、中勘助三十一歳、江木妙子八歳であり、最後の大正六年十一月〈十六日〉には、勘助は三十二歳、妙子は九歳になっている。

（略）こなひだの晩江木のところへよばれた時ちよつと二階へあがつてきたけれど向うむき

に膝へ腰かけたし、それに恥かしいのかくねくねと体を動かしてちつとも落ちつかなかった
ので、しみじみ顔を見ることができなかつた。さうして折角頬ずりしようとすれば

「髯が痛い」

なんて逃げてしまつた。(略)

(略) 私は見てゐるうちにたまらなくなつて

「ちよつとここへいらつしやい」

と膝をたたいて見せたらすなほに立つてきてこちら向きにのつた。

「ほつぺたのおつつけつこさせて、いつぺん」

すこし笑ひながら 玩具をもらつたからしかたがない といふやうに黙つてゐる。それを
ひきよせるやうにしてそうつと頬ずりをする。今日は髯が剃つてある。

「痛くないでせう」

「今日は痛くない」

ぶよぶよふくらんだ頬へながいキスをしてやる。じつとおとなしくさせた。なんだ
かこんなにしてもこちらの気もちがちつともさきへ通じないんだからいつももの足りないや
うな歯がゆいやうな具合だが、それだけやつぱり気もちよく可愛がることができる。さうし
て常に飽きるといふことがない。妙子さんは膝からおりて玩具をかたづけはじめた。

昨日妙子さんを思ふ存分可愛がることができなかつた私はなんだか不得心で今日もまたいつた。(略)

(略) 私は茶の間で妙子さんを膝にのせて——むかうからのつてきたのかもしれない。——からかつている。と、妙子さんは急に思ひだしたやうに、そしてさもたまらなさうにひとの頸にかじりついて

「大好きだー、だい好きだー」

といつて頬ぺたをしつかりおつつけてはなさない。私はくつついたままなにかの拍子でふと左てをみたらすぐそばの鏡台の鏡に二人の影がうつつてゐた。

(大正六年四月五日)

(略) 茶の間にいらしたお母様のまへに坐るとすぐに妙子さんは左脇から抱きついてきて頬をおつつけたが髻がすこしさはつたもので

「あした髻すつていらつしやい」

といつた。さういひながらなんだかまた抱きついてきたと思つたらこんだは頬ぺたとちがつたものがさはつた。ふと気がついたらキスをしてゐるのだつた。こないだからときどきこんな感じがしたのを私はうつかりしてゐた。

(四月七日)

(略) 家の近くへきて杉垣のあひだの小路へはひつたときお稽古の本の包みの紐をなほすためにちよつと手をはなしたが結び終つてまた外套の下へ手をのぼした。さうしてそこに待ちかまへてる私の手と握りあつたときに、嬉しいのか、きまりがわるいのか、はじめてこちらを見あげてにつこり笑つた。……私も嬉しくて、可愛い可愛いといふ心をこめて笑顔を見かはしてゐる。私はさつきからの物足りなさをいつぺんにとりかへした。そして恋人にでもするやうにじいつと手に力を入れて握りしめた。

(四月十三日)

「さあここへいらつしやい」

と膝をたたいてみせたら向うむきに腰かけた。

「顔が見えないから」

といへば

「ええ」

と同感なやうなことをいつてこちらむきに膝のうへへ坐らうとするのを

「跨つたはうがいい」

といつてさうさせる。このほうが自由にキスができる。右の頬へいくつかそうつとキスをする、今日切つたばかりの眼が痛まないやうに。こなひだのものもらひを瞼の内側から切つたのだ。妙子さんは今日はなんだか沈んでる様子でしんみりと懐しさうに話す。私はまたひと

つキスをして

「これどういふときするもの」ときく。

「知らない」

「あなた私にしてくれたぢやありませんか」

「わかつてゐるけれどなんだかいへない」

ほんとにどういつていいかわからないらしい。

「私あなたが可愛くてかはいくてたまらないときするのよ。あなたも私が可愛くてかはいくてたまらないときするの?」

「ええ、さう」

今夜はどうしたのかいつまでも誰も出てこないので存分可愛がることができた。妙子さんもいつになく膝のうへにおちついてなにかと話す。私はただもう可愛くて可愛くて抱きよせては抱きよせては顔を見つめる。

「あなた私大好き?」

「大好き」

「でも今に忘れちまうんでせう」

「お稽古が忙しくなれば忘れるかもしれない」

「私どんなに忙しくたつてあなたのことを忘れないのに。ひどい」

「そりや私子供だから」

妙子さんは綴り方の話をしだした。点のわるいのが気になるのだ。

「あなたがお嫁にくるまでに文章が上手にかけるやうに私がすっかり教へてあげるから」といへばさも安心したらしく、また嬉しうに、習ひにくる　といふ。いぢらしくて、いとしくてならない。さうしてゐるあひだにも時どき　私が好きでたまらない　といふやうに胸を押しつけて、腮を肩へのせてそうつとすがりつく。

(四月十九日)

(略) 久しぶりの可愛さに私は自分でもをかしいほどせきこんで後先もなくいろんなことをいひながらおしろいのはげないやうにそうつと頬ずりをする。そうつとキスをする。さうしてゐるあひだも妙子さんはまだ恥かしうに　えへ　いひ　と笑つてばかりゐる。私は内證話のやうに小さな耳に口をよせて

「キスして」

といふ。可愛くてならないのをじつと笑つて覗くやうな具合に顔を見つめる。私の腮の下に私を見あげてゐる顔、それは一層恥かしうに笑つてゐるがちつとも厭さうではない。してあげてもいい　といふやうな眼が光つてひとを見ながらも促されればかへつて思ひきれない。

「はづかしい？」

黙つて笑つてゐる。

「あんなに長いお話かいてあげたのにちつとも可愛がつてくれないでひどいと思つちやつた」

「でも小さくないから可愛がれない」

(六月二十九日)

最初はへ折角頬ずりしようとするれば「髯が痛い」なんて逃げてしまつた。妙子が、自分の方からキスをしてくるようになっていくのが、以上の引用からわかるだろう。引用箇所は勘助と妙子の「接触」の部分を切りとつたのであるが、他の部分のやりとりも、話題は子供に合わせたの玩具や綴り方であっても、妙子と「接触」するという勘助ののぞみ、或いは目的を増幅する妙子の可愛らしさの描写に他ならず、「接触」へのアプローチとさえ感じられるほどである。

母と祖母の懸念

三十歳すぎの男と八つか九つの女の子の、こういう「接触」が男のたんなる「子供好き」によるものかどうかは、やはり問題としなければならない。成績の上つた綴り方を見せたあと、へ膝の上ですこしはにかなでる妙子さんの顔を見て私が「さすがは中さんのお嫁さんだ」といへば江木は「口をつねつておやり」とけしかける。というように、妙子の父親江木定男は冗談ですませているが、さすがに母親と祖母はふたりの「接触」になにかを感じとっているのが、次のようなやりとりでわかる。

「こないだおばあ様とお母様で中さん嫌ひだつていつてた、妙子の行儀をわるくするからつて」

お母様は狼狽して

「いつそんなことをいひました」

ときめつけてもびくともせずに子供らしい誇張を加へていい気もちにすつばぬく。事實はかうらしい。妙子さんがもうねついたと思つてお母様と□□さんとで、私が妙子さんにキスしたり抱いたりするもので妙子さんがむやみにキスしたり行儀がわるくなつたりして困ると話したのを、まだ眠つていなかつた悪者がちゃんと小耳にはさんでたのだ。妙子さんはしつかり私に抱かれながら

「妙子と中さんとあんまりながいいもんだからおばあ様が妬^たむんだ」

といふ。みんな転げて笑ふ。お母様も。

ここで妙子の母親と祖母は、はたして勘助の妙子への「接触」がたんにへ妙子の行儀をわるくするだけのものだと思つてゐるだろうか。彼女たちがへ中さん嫌ひ」といったのは、そんな単純なことではないはずである。勘助は妙子のつげ口で当然そんなことは察知しただろうが、妙子本人も母親と祖母がなぜへ中さん嫌ひ」といったのか知つてゐるのだ。へみんな転げて笑ふ」のを尻目に、かれらふたりの次のようなシーンがつづいてゐる。



江木 妙子

妙子さんはこれ見よがしに私の頸にかじりついてきついキスをする。ひとつとしてはふりかへつてわざとお母様の顔を見る。またひとつしてはふりかへる。そして もうたまらないといふやうに両腕でしつかりしがみついて頬をおつつけてはなれない。私も嬉しくて「そんなことするから叱られるんぢやありませんか」

と口にはいいながら これ御覧なさい といふやうな気もちで笑ひながらお母様の顔を見る。お母様も笑ひながら、でもやつぱり心配さうに

「そんなに気がひのやうになるからいふんですよ」

といはれるのを、妙子さんはやけに捨鉢に私にからみついてしつかりと抱きしめさせながら

「中さんが帰つたあとできつと妙子叱られるんだ。ちやーんとわかつてる」

といつて

「今日はどうしても帰らせない。お泊りしていらつしやい」

といふ。

(十月十九日)

こういう妙子の行動には、母親と祖母は見抜いているのに、「行儀をわるくする」などとキレイゴトで隠蔽しているものを、わざと暴露してやろうという悪意があるのを感じさせる。しかし、その妙子の悪意は、勘助のそれに比べればやはり子供らしいといわねばならない。

これまでの引用箇所の中で何度も出てきた「お母様」というのは、じつは妙子の母親ではない。